

機関番号：84604
 研究種目：研究活動スタート支援
 研究期間：2009 ～ 2010
 課題番号：21820082
 研究課題名（和文） 東アジアにおける古本州島後期旧石器文化の特殊性とその形成過程の研究
 研究課題名（英文） Study on the characteristics and the formation process of the Upper Palaeolithic culture of Palaeo-Honshu Island in East Asia
 研究代表者
 森先 一貴（MORISAKI KAZUKI）
 独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所・都城発掘調査部・研究員
 研究者番号：90549700

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、日本列島（ここでは北海道を除く‘古本州島’と呼ばれる地域）の旧石器時代文化に地域性が形成されていく過程と、それらの文化が東アジアの中で有した特殊性、およびその形成背景の解明にある。本研究では代表的道具たる石器の編年研究を通じて諸文化の多様性と形成過程を整理した。その結果、多様性は主に自然環境差を大きな要因として生じていると予測された。自然環境差が人類文化の差異に強く影響したきっかけは二度の強いインパクトをもった気候変動であったと考えられる。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study is to discuss what yield the variability and characteristics of Upper Palaeolithic human cultures in ‘Palaeo-Honshu Island’ which was a merged landmass of three islands, Honshu, Shikoku, and Kyushu, due to the sea-level regression in the glacial period. The chronological study of the archaeological assemblages from the Palaeo-Honshu Island and the adjacent areas made it clear that temporal differentiation of natural environment which triggered by two sudden climatic change chiefly led to the variability of human cultures.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2009年度 | 780,000 | 234,000 | 1,014,000 |
| 2010年度 | 720,000 | 216,000 | 936,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 1,500,000 | 450,000 | 1,950,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：考古学、東アジア、古本州島、後期旧石器文化、地域性

1. 研究開始当初の背景

後期旧石器時代（3.5～1万年前）は氷期に相当することから、水分の陸地への固定による海面の低下を受けて、現在の本州・四

国・九州はひとつの大きな島、「古本州島」を形成していた。同じ理由で、現北海道は現サハリンと連結して大陸とつながり、古本州島は大陸から突き出したサハリンー北海道半島

と韓半島とに挟まれて浮かぶ独立した島を形成していた。

このような地理的条件にあることから、古本州島の諸地域文化は、既存の時期区分によれば後期旧石器時代前半期（3.5～2.5万年前）と後半期（2.5～1万年前）の移行期を経て隣接大陸部と異なる特殊性を有するに至ったことが知られている。しかしながら、隣接大陸部と交流関係を築きながらも、こういった要因を背景として地域独自性もつに至ったのかという問題は、まだ十分に比較検討されていない。

この課題への取り組みが捗々しくなかった理由として、1970年代以後に考古資料が急増した我が国ではまずは増え続ける各地資料の整理に基づく地域内研究が中心で、広域比較研究が活発でなかったことや、本研究課題が対象とする地域（特に韓半島・九州）では、1990年代後半によく広域編年上の重要資料が急増したこと等が挙げられる。北海道と東北地方、韓半島と九州地方という地域間比較を可能とする条件は、近年になりようやく整い始めたといえる。例えば、韓国－日本の旧石器文化比較研究を精力的に推進する韓国側の研究者は、最近、韓半島における後期旧石器文化の変遷案を独自に構築し、九州地方を中心とする日本列島旧石器文化との比較に着手している。ただし、九州地方の編年は南九州で増加した新資料をもとに最近大きく進展しており、この成果をより積極的に取り込んだうえで比較する必要がある。逆に、九州地方の研究動向には、最近の南九州地方の編年の進展を土台にして韓半島の編年観と比較しようとする動きが活発とはいえない状況である。

東北地方と北海道地方の比較の場合も問題がある。後期旧石器時代前半期には類似した旧石器文化が展開していた可能性があるが、同後半期には前者地域に石刃石器群が、後者地域に細石刃石器群が展開し、人間集団の石器製作技術に際立った差異が生じ、生活様式にも相応の差が生じていると推定される。この差異の形成過程や背景は、未解明である。両地域間の比較研究自体が活発でなかったことや、北海道地方はともかく、東北地方の旧石器編年がごく最近まで流動的にならざるを得ない（定点となる年代測定値や出土状況をもつ考古資料の少ない）状況にあり、比較の前提が整っていなかったためである。

2. 研究の目的

古本州島旧石器文化の特殊性とその形成過程の解明は、後の時代における我が国の東アジアにおける独自の歴史の解明に寄与することが期待されるため、本研究ではこれを研究目的とした。

この目的に照らして、大陸部との接点とな

る地域に焦点をあてて古本州島と大陸を比較することが最初の基礎的アプローチとなると予測した。すなわち、古本州島北端（東北地方）および西端（九州地方）の旧石器文化を、隣接大陸（サハリン－北海道半島および韓半島）と比較し、そこに地域差が生じるに至った過程とその差異の内容・背景を詳細に検討することが、我が国先史文化の独自性形成過程を解明する最重要・最適の課題であると考えた。この研究は、東アジアのなかでも独自の旧石器文化であり、かつその後の日本の基層文化を成した縄文文化の変遷過程や特殊性の背景を理解にも大きく寄与することが期待できる。

具体的目標として、1. 考古資料の現地調査・文献上の調査により古本州島と隣接大陸の旧石器資料を編年的に対比すること。2. 編年案に基づき、石器製作技術やそこに反映された人間集団の生活様式（適応戦略）の差異を地域間で比較すること。3. 1・2の作業に基づき、古本州島と隣接大陸との交流関係の通時的変化を整理すること、の三つが挙げられる。

3. 研究の方法

編年：研究の方法として、申請者を含め既往の研究が大略を構築している古本州島内の旧石器編年に、隣接大陸の旧石器資料を対比していくという作業から着手する。古本州島の旧石器文化が、隣接大陸となぜ、またどのように異なっていくのかを解明することが本課題の目的である。したがって、研究の方法としては、申請者が最新資料を用いて古本州島全域を対象に構築してきた編年網に、隣接大陸の旧石器資料を対比していくのが有効である。方法的にはオーソドックスであるが、これまで古本州島内の編年が確立していなかったためにこのような研究が活発化しなかったのであるから、この段階から地道に着手することが必須かつ効果的である。編年対比では石器の型式対比を基本とはするが、それだけでなく、火山灰層序学や放射性炭素年代測定値を悉皆的に集成し、対比基準として参照する。韓半島・九州や北海道・東北という地域間では、型式対比が容易ではないことが多い。このように直接的な対比が難しい場合には、それぞれの地域で地域編年を確立し、数少ない定点（年代値や層位、地域を越えた異系統石器の共伴）を手がかりに、地域編年間の関係を解きほぐしていくことになる。

なお、編年対比の際には、韓半島および北海道地方を大きく南部と北部に分け、南部資料を古本州島と対比し、さらに北部の資料へと編年的接続を図るという段階の手順を踏むべきだと考えている。つまり、最近接地域間での編年対比を原則とするのがよい。

石器製作技術・生活様式：以上で古本州島

旧石器文化と、その両端における隣接大陸旧石器文化との編年的関係が整理される。そこで次に、石器群にみる石器製作技術分析をおこなう。旧石器時代の生活集団は、所与の自然環境下で生存するために、食料資源の獲得方法やタイミング等の戦略を練り、程度の差はあれ計画的行動を繰り返していたはずである。もちろん石器とは食料資源を効率よく入手するための利器であるから、その製作技術や運用法は、食料獲得の戦略、生業の戦略と不可分に結びついている。つまり、その製作者の生活様式の基本的側面を反映していると考えられる。

編年対比の後に、古本州島と大陸部とで石器製作技術やそこに反映された生活様式（適応戦略）を比較・整理し、共通点および相違点の整理と分析、その通時的変化の解明をおこなうという手順が効果的と考えられる。

さらにその後、地域差や通時的変化の背景をなすと考えられるいくつかの要因を検討し、最終的な解釈を導くのが妥当であると考えられる。

4. 研究成果

研究期間中に、古本州島東北端（東北地方、中部地方）と同西端（九州地方）において新出資料を中心に集中的に対象時期に属する考古資料の調査をおこない、大陸部との編年対比の基準となる古本州島編年を補強したのち（2009年度）、ロシア連邦における隣接大陸部（サハリン州）での資料調査を行い、編年の比較を進めることができた（2010年度）。また、同時に、当時の人々の生活の背景にある自然環境差・地理的条件やその通時的変化についてのデータもあわせて集積し、旧石器文化の地域性と対比する作業を並行した。

その結果、少なくとも後期旧石器時代後半期以降の文化的要素は、大陸側（含む、北海道）で共通点が多く、古本州島南部はそれらと共通の要素を有しつつもやや異なる地域であり、古本州島東北部はその中間的特徴を有しつつも基本的には古本州島西南部との類似性がより強い地域として把握できることが判明した。これらの共通点と相違点はおおむね自然環境（植物・動物相）の差異と対応しており、両者の相関性を推測させる。自然環境データは近年蓄積がめざましいためこれを集成し、考古資料から推測される過去の人間行動と対比しながら、古本州島での人間行動の多様性・特殊性の形成過程を説明し、また大陸部との違いの生態学的背景を説明する見通しを得ることができた。いまのところ、上記の地域差の形成過程は現在のところ次のようにまとめておくことができる。

つまり、後期旧石器時代の中ごろにおこった著しい寒冷・乾燥化と針葉樹林化の進行に加え、大型哺乳動物の減少という状況に遭遇

した各地の人間集団が、それまで活発に行ってきた広域移動型の大型獣狩猟から森林棲中小型獣狩猟中心の地域回遊行動へシフトすることで、相対的に狭い範囲への適応を志向する生活様式が、古本州島を中心に成立し、地域間の差異が顕在化したと考えられる。なお、古本州島東北部では、北方系動物群の影響を受けやすく、同西南部ほどには環境変化が急激ではなかったことから、後半期に入っても大型獣狩猟が相対的に活発に行われたと考えられるが、OIS2 後半には徐々に地域化を遂げた。各地では石材環境や動植物・地形環境の異なりに適応した地域色豊かな石器技術・狩猟具が発達した。このような様式差の顕在化は、地域社会の成熟と地域社会間同盟の強化を反映していると考えられる。一方、サハリンー北海道半島では、OIS2 を通して引き続き細石刃石器群が盛行する。本来広域移動にもっとも適合した細石刃石器群の運用が継続的に発達した背景には、古本州島とは異なって更新世型の哺乳動物相がより新しい時期まで存続していたことが関係すると考えられる。

さらに、旧石器時代終末～縄文時代草創期の石器群分析では、技術差・スタイル差や行動戦略の相違など旧石器時代以来の石器群の相違が認められ、早期以降にはさらに細かな地域差が成立する。縄文時代（完新世）への移行にともない日本海には大洋流が進入し、顕著な湿潤気候化と生態系の細区画化が進行した。石器群の分析と合わせて考えれば、こうした環境変化の結果として従来以上に細かな地域生態系への適応の進行と、同時にアジア大陸部とは異なる独自の定住型狩猟採集文化から構成される新石器文化が展開したものと考えられる。

今後の研究の継続によって、古本州島旧石器文化の特殊性をより詳細に記述・説明する見通しと、貴重な手がかりを得た。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

①Sato, H., M. Izuhō, K. Morisaki. 2011. Human cultures and environmental changes in the Pleistocene-Holocene transition in the Japanese Archipelago, *Quaternary International*, 237: 93-102. 査読有

②Morisaki, K. (In press) 2010 The evolution of lithic technology and human behavior from MIS 3 to MIS 2 in the Japanese Upper Paleolithic. *Quaternary International*. doi:10.1016/j.quaint.2010.11.011. 査読有

③森先一貴 2011 「石器群の広域編年からみた地域社会の形成過程—多様な系統の理解と「ナイフ形石器文化」—」『石器文化研究』16、109-116 頁。査読無

〔学会発表〕(計 1 件)

①Morisaki, K., M. Izuhō, H. Sato 2010 Upper Paleolithic Technological Organizations response to landscape changes in Northern Japan. In *The Initial Human Habitation of the Continental and the Insular Parts of the North East Asia. the proceedings of the International Symposium Yuzhno- Sakhalinsk*. Sakhalin State University. pp. 135-141. (招待講演)

〔図書〕(計 1 件)

①森先一貴、六一書房、旧石器社会の構造的変化と地域適応、2010、262 頁

6. 研究組織

(1)研究代表者

森先 一貴 (MORISAKI KAZUKI)

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・研究員

研究者番号：90549700

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：